

うらかみまさとう

国境守備の浦上正任

「入り鉄砲 出女」
——この言葉は徳川時代に治安上、鉄砲を関八州へ持ち込むことや、江戸住まいの各藩大名夫人が勝手に帰国するのを禁止して、諸大名の反乱を未然に防いだことから生まれました。

室町後期から登場した鉄砲は、それまでの戦闘を大きく変えました。各藩は権威を守るために、この“鉄則”を導入しました。筑前・福岡藩でも国境にあたる街道筋には関番所を置き、通行人のほか、すべての物資輸送にまで厳しい監視の目を向けました。

筑紫野市の西部、九千部山の登山口、平等寺の村はずれにある通称「堤



▲浦上正任の墓碑（左）



▲旧平等寺村

山」の墓所に、苔蒸した自然石（高さ1m）が見えます。墓碑の主である浦上正任（1547～1631）は、この地で国境を守り抜いた福岡藩の武将です。碑文は読めませんが、『福岡県地理全誌』（明治初期刊行）によると「香雲淨詠禪定門」と刻まれているようです。

正任は備前（岡山県）美作国の天神山城主の末孫でしたが、1601年（慶長6）、黒田長政に招かれ家禄150石を与えられました。小河内蔵允之直が御笠郡主*の時、その与力（有力家臣）となり、御笠郡の西南口にあたる平等寺村に国境守備使として赴任、1631年（寛永8）

に病死するまで同地で過ごしました。享年84歳。

平等寺村一帯は戦国時代、肥前からの最短路として利用されたようで、秀吉の九州統治前は龍造寺、島津勢がここを越えて筑前に侵入したとされています。すぐ近くの水源、山神ダムの建設で水没したところに、「薩摩屋敷」の地名が残っています。その名の通り島津勢が陣取った所と伝えられています。

浦上氏は、1677年（延宝5）に正貞が黒田藩家老となり、正質（号数馬）は同藩佐幕派の家老となりましたが、勤王派弾圧の責任をとって、明治維新直後に切腹したという悲劇

の家柄でもありました。正任の邸宅跡は、かつて庄屋を営んだ船越家の一統が住み、のちに筑紫野市初代市長となる船越平八郎が出ています。

〈参考〉高原協三資料

※御笠郡……現在の筑紫野市、太宰府市、大野城市の範囲。明治29年、現春日市、那珂川町、福岡市の一部を含めて筑紫郡となつた。

